本県ゆかりの作家

笹沢左保さん死去

「木枯し紋次郎」で人気

「あっしには、かかわりのねえことで…」というせりふが流行語になった「木枯し紋次郎」シリーズなどで知られる本県ゆかりの作家、笹沢左保（ささざわ・たもつ、本名勝＝まさる）さんが二十一日午前二時五分、肝細胞がんのため東京都狛江市の病院で死去した。七十一歳。横浜市出身。自宅は公表していない。密葬は親族のみで行った。「しるべのぶな」を十一月二十二日午後一時から、東京・虎ノ門のホテルオークラで開く。喪主は妻、佐保子（さほこ）さん。

「木枯らし紋次郎」の出身地、上州新田郡（こおり）三日月村の所在地としている嬬恋本町にはテーマパークの三日月村があり、四年前には同パーク内に、笹沢さんの文学館ともいえる「紋次郎記念館・かかわりなし」が開館した。新里村には文学碑があるほか、戦後の一時期、父で詩人の美明（よしあき）さんとともに高崎市に住んだこともあり、紋次郎シリーズのほかにも本県を舞台にした作品を書いている。

笹沢さんは郵政省職員などいくつかの職業に就きながら推理小説を書き始め、一九六一年に「人喰い」で日本探偵作家クラブ賞（現日本推理作家協会賞）を受賞。速筆を何本も並行させる流行作家となった。

推理、サスペンス、時代小説など執筆は多ジャンルにわたり、七〇年代に入って脱旅（またたび）ものの「木枯し紋次郎」シリーズを発表。長いようじをくわえたニヒルな渡世人が、中村敦夫さん主演でテレビドラマ化され、大きな人気を集めた。

八八年、自然環境を理由に東京都内から佐賀県内に移住。九一年からがんの闘病を続け、昨年東京に戻り、自宅で療養していた。

多作で有名。著作は三百七十七冊に上った。作品には〝人間不信・虚無・孤独〟などが色濃いと評された。二〇〇〇年、長年の功績で日本ミステリー文学大賞を受賞した。

小説以外にも青少年教育に熱心で、父性復権などを唱えた。作品に「招かれざる客」「仙殺岬」「殉調空」など。

1998年4月、木枯し紋次郎記念館のオープンで、紋次郎笠で並ぶ笹沢左保さん（右端）＝嬬恋本町

私の人生を変えた人

参院議員・俳優の中村敦夫さんの話　笹沢左保さんが「木枯し紋次郎」を書かなければ、私の運命もまったく違ったものになったはず。私の人生によって非常に大きな存在だった。おとこ気があり、原作者だからといって撮影現場に口を出すことはなく、度量が広かった。

「一度くらい、俳優として共演しましょうよ」と誘い続けたら、彼自身の原作で実現したけれど、彼が南定忠治役で、僕が紋次郎。忠治役の彼が、紋次郎に延々と説教する名場面がつくられていて、あれは夢のようだった。「やられた！」と思いました。そんな風にちゃめっ気もたっぷり。本当に面白く、一緒にいて楽しい方でした。

本県関係者に驚きと落胆

笹沢左保さんとのゆかりが深い嬬恋本町は訃報（ふほう）にショックを隠せない。同町観光協会長でテーマパーク三日月村社長、伏島晴彦さんは「毎年のように足を運んでくれた。今年も夏と先月末に来たばかり。最後に会ったのは日帰りでした。その時は『おれがんで長くないんだよ。病院から抜け出してきた』と言っていましたが、今にして思うと、見納めに来たのか…」と肩を落とした。

三日月村建設は晴彦さんの父でホテルふせじまの会長、武二さんが働きかけた。県内の他の自治体も名乗りを上げたが、武二さんの積極的なアプローチが功を奏し、一九八〇年にオープン。建物や街道の様子などの時代考証は笹沢さんが引き受けた。街道筋の居酒屋のたたずまいが特に気に入っていたという。

四年前、笹沢さんの全著作や生原稿、木枯し紋次郎の映像をそろえた記念館も開館。オープニングセレモニーには笹沢さんら関係者が旅人（たびにん）スタイルで長いようじを飛ばすパフォーマンスを行った。

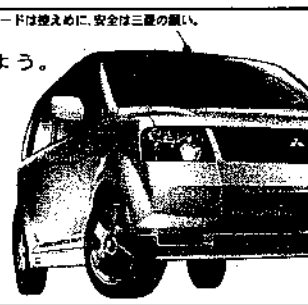
晴彦さんは「無骨のイメージがあるが、常識のある、内容の豊かな博識の人だった」と思い出を話す。同町の小川憲一町長も「町の視光に大きく貢献してくれた。立派な人をにくして残念」と悼んだ。

新里村は小説「私説国定忠治」に新川の地名が登場することから、村内の不二山に六年前、笹沢さんらの小説の一部を刻んだ文学碑を建立した。

この碑を移転する計画があり、その際、笹沢さんを招いて正式な除幕式を行う予定だった。建立にかかわった同村職員の小里昌寿さんは「文学碑をつくる話をしたら、碑文用にわざわざ文を書いてくれた。義理人情があり、心の温かい人。文学碑を見てもらいたかった」と落胆していた。

時の話題

▽上越クリスタル硝子（月夜野町）は、年末年始の縁起物として人気のあるガラス製の「干支（えと）シリーズ・未（ひつじ）」＝写真＝の販売を開始した。▽今年は四月末に五種類のデザインを作り、六月に試作した上で七月から生産に入り、来年の春までに二万個の販売を見込んでいる。出吹き一法の手作り製品を軸にレリーフタイプも販売。透明なガラスに金ばくを施した一万円から、レリーフタイプの五千円の製品まで五種類ある。▽同社は「ガラスの凹凸で乗らかいヒツジの表現をしたり、白にグリーンのガラスを採用して草原の姿を再現した」と話している。



この印刷物の文章・写真等の著作権は上毛新聞社が保持しています。無断転載、複製及び頒布は禁止します。